

【音楽科】教科提案

「つなげる」ことでせまる音楽の魅力 ～思いや意図をもって表現できる子どもに～

1. 研究テーマ設定の理由

(1) 学校提案とかがわって

音楽科では、学校提案「問い続け、学び続ける子どもたち」を受けて、昨年度は「つなげる」をキーワードに、授業で身に付けた知識や技能、学習したことを使って、意欲的に工夫しながら音楽活動を行う子どもの姿をめざして実践・実証を重ねてきた。鑑賞と音楽づくり、鑑賞と器楽など、表現と鑑賞の各活動を関連付けて題材計画を立てることで、音楽のもつ魅力や味わいをより感じることができ、子どもたちの学習意欲が高まることが確かめられた。また、グループ活動を取り入れることで、仲間と合わせる喜びや心地よさ、仲間と創り出す楽しさを味わう子どもたちの姿が見られた。一方で、「子どもと教師の思いにずれがある」「思いや意図が音楽的な要素や音楽の仕組みとつながっていない」などの課題があった。

本年度は学校提案「問い続け、学び続ける子どもたち～子どもの言葉でつくる授業～」を受けて、音楽科では昨年度に引き続き子どもたちを主体とした「つなげる」をキーワードとする。さらに、本年度は、どう表現したら良いかを思考・判断する経験を積み重ねたり、音楽表現に対する思いや意図を言葉で表現するなど、思考・判断の過程を大切にしたりしながら「思いや意図をもって表現できる子ども」をめざす。子どもとつながる対象として様々なものが考えられるが、特に次の3つの対象とのつながりを大切にする。

①教材（楽曲）とつなげる

「させられる」のではなく、「もっとやってみたいな」「こんなふうに表現したいな」と一人一人が音楽を楽しむ姿が理想的である。まずは、鑑賞や音楽づくりの授業を中心にしながら、子どもたちが主体的・創造的に取り組める授業を展開し、一人一人の気付きや感じ方をクラス全体で共有・共感したりすることを大切にする。そうすることによって、鑑賞や音楽づくりで得たことを自分の音楽表現に生かし、思いや意図をもって表現しようとする子どもにつながると考える。

②仲間とつなげる

思考力・判断力・表現力は仲間とのつながり（コミュニケーション）を通して培われると考えている。仲間の気付きや奏でる音に耳を傾けて聴き合える関係づくりを積極的に行っていきたい。また、言葉を介して協同的に音楽活動に取り組むことで、音楽表現に対するイメージをより明確にしながら、仲間と共に音楽を創り出す喜びや楽しさを実感してほしい。

③自分とつなげる

過去の経験や既習内容を生かして音楽をつくったり表現を工夫したりすることができる力を育む。また、互いに表現する場を設けたり、自分たちの表現を客観的に見る場をつくったりするなどして、自分の学びを振り返ることが出来るようにする。「こんなことができた。」「表現を聴いてもらった。」と達成感を味わうと共に、「次はこんな表現をしてみたい。」と学ぶ意欲を持続させるようにする。

(2) サブテーマにかかわって

①音楽科における言葉とは

音楽科では、言語のみならず、音や音楽を口ずさむこと、聴き取ったり感じ取ったりしたことを絵や図、線などで表すこと、歌いながら指揮をするように手も動かしているなどの身体表現も含めて「子どもの言葉」と捉える。

②子どもの言葉でつくる音楽科授業

子どもたちが自分にとって価値のある表現活動を創り出すためには、表現に対する自分の考えや思い、意図を一人一人がもつことが大切である。音楽を聴いて感じ取ったり気付いたりしたことなどを自分の言葉で表したり、どう表現したいか思考・判断して仲間と伝え合ったりすることで、自分の表現したいイメージや思い、意図を明確にする。さらに、「どのように表現したらよいだろう?」「どのように音を重ねたら思い通りの響きが生まれるだろう?」「みんなの演奏をそろえるには何が必要だろうか?」など、思いや意図を「音」「表現」にするために、常に仲間同士で言葉の具体的な内容を音で確かめながら共有することで、学びを深める。

(3) 音楽科でめざす子ども像

音楽的「知識・理解」「技能」「能力*」をバランスよく身に付けることで、自分に合った生活スタイルを見つけ、自分を音楽で豊かにし、生涯音楽の基盤を手に入れようとする子どもをめざす。この3つの中でも特に「能力」は仲間と共に学ぶからこそ身に付く力であると考え。そこで、音楽科がめざす子どもの姿を次ようにした。(※ここで言う「能力」とは、「思考力・判断力・表現力」の総称である。)

自ら進んで音楽に向き合い、仲間と試行錯誤しながらよりよい音楽を求めていく子ども

つい、「よい演奏をさせたい」「よりよい音楽をつくらせたい」などの教師の思いが強くなり、教師主導の授業になってしまうことがある。しかし、学んできたことを生かしながら、思いや意図を思い通りに表現するにはどうすればいいかを仲間と共に考え、工夫することを楽しめる子どもを育てていきたい。

そのために、まずは常時活動を充実させて仲間とのつながり（コミュニケーション）を深め、ペアやグループ活動などを取り入れて、自分の考えを言葉で伝え合う場面をつくっていきたい。

2. 音楽科学習における「問い続け、学び続ける子どもたち」

(1) 音楽科における“問い続け、学び続ける子どもたち”の姿

音楽科では、「問い続け、学び続ける子どもたちの姿」を次のように定義する。

自ら問いとなることを見つけ、夢中になって表現の工夫をしたり自分の思いで聴いたりしようとする姿

音・仲間・自分とのつながりを大切にしたい授業づくりを行い、題材を通して学習意欲を持続させながら一人一人が音楽と向き合えるようにする。また、音楽表現への思いや意図を実現していく過程で、自ら問いとなることを見つけ、仲間と関わり合いながらその問いの解決に夢中になる子どもの姿をめざす。

以下に、具体の姿を示す。

学びを追究する子ども
○音楽と積極的にかかわり、音楽表現への自分の思いや意図、考えをもつことができる ○思いや意図を音や音楽、言葉などを通して表現するために、様々な表現の仕方を工夫したり、進んで必要な技能を身に付けようとしたりする
他者との関わりを大切にしている子ども
○それぞれが感じたこと、分からないことなどをペアやグループ、集団で共有しながら、積極的に関わり合いを求め、学び合おうとする ○多様な音楽や表現方法に触れ、気付いたことを自分の表現に生かそうとする
学びを実感する子ども
○授業で身に付けた基礎的・基本的な知識、技能や学習したことを使って、表現の工夫をしたり、思いをもって聴いたりしようとする ○自分の表現を発表したり客観的に見たりすることで、達成感を味わったり、学びの意欲を持続することができる

(2) 音楽科における子どもへのみとりと支援

子どもへのみとりと支援については、下記の5つのことを重点的に進めていく。

- ①細やかな評価規準や評価計画の作成（短期的、または長期的な視点で一人一人の学びの深まりや変容のみとり、どのような支援が必要であるかを考えて学習を展開していくようにする。）
- ②ICT機器の活用（子どもたちの興味・関心を広げたり、より学習状況を把握しやすくしたりする。）
- ③ワークシートの工夫（考えや思いが的確に表現できるようにする。）
- ④長期的に子どもの学びをみとる（①③を活用し書き込み状況を記録（コピー等）し、個人カルテとしていく。）
- ⑤子どもたちの関係性をとらえる（仲間とどのように関わり合い、支え合って学びを深めているかなどの子ども同士の関係性を関係図や座席表に記録し、把握する。）

(3) 事例：5・6年F組の実践から「リズムを選んでアンサンブル」

そうし：ぼくのイメージ言ってもいい？ぼくが思ってるのは、1人で学校へ来たんだけど、忘れ物したことに気付いてまた家へ慌てて戻っていくっていう感じの曲にしたいんよ。

ゆうた：うんうん。ということは…まず一人で演奏して、それからだんだん音が加わっていくけど、また一人で演奏する感じにしたらいんじゃないかな？

りん：慌てて戻っていくんだから少し速くしていてもいいかもね。

これは、どのようなリズムアンサンブルをつくるか3人グループで話し合っている場面である。このように仲間に思いを伝え、それを音楽的な要素と絡ませながら話し合うことによって曲のイメージを共有し、思いを形にするにはどうすればいいのか試行錯誤している。

3. 研究の展望

音楽科では、子どもたちが質の高い音楽的な力を身に付けるために、「つなげる」をキーワードに表現及び鑑賞の楽しい活動を通して、音楽の魅力に迫りたい。思いや意図をもって表現できる子どもを育てるために、以下の方法で問い続け、学び続ける子どもたちをめざす。

①主体的に取り組める鑑賞活動を展開する

これまでも実践してきたことであるが、受け身になりがちな鑑賞活動を子どもたちにとって主体的な活動にし、表現活動と関連付けていくことで学びがより深まっていくと考えている。明確な聴く視点を与えたり、身体表現を取り入れたりするなど、楽しみながら音楽の仕組みや音楽を形づくっている要素に迫れる鑑賞活動にする。また、ねらいに応じて視聴覚教材を用いたり、学んだことを振り返りやすくするための掲示を工夫したりする。

②常時活動を充実することによって、音楽・仲間とのつながりを深める

拍の流れにのって演奏する力や歌やリコーダーの演奏技能を高めるなど、音楽の基礎的・基本的な技能や能力は、系統立てて積み重ねていくことが大切である。即興的なリズムリレー演奏やリクエスト曲、音楽に合わせて身体を動かしたりするなど、子どもたちにとっては遊びと感じられるような楽しい音楽活動を常時活動として授業のはじめに位置付けることによって、基礎的な音楽の力を自然に身に付けさせたい。また、常時活動において、仲間と音楽に楽しく触れ合うことで仲間とのつながりを深め、高め合える関係づくりを行っていきたい。

③子ども同士のつながりをとらえる

子どもたちがどのような仲間との関わり合いの中で学びを深めていくのかをとらえていく。子ども同士が支え合いながら学び合っていく姿に着目することで、教師がどのタイミングで支援すべきであるかが見えてくると考えている。子ども同士のつながりを記録し、子どもたちの関係性をとらえながら授業を展開する。

4. 研究の評価

次の①～③を評価するために、子どもの表情・発言・演奏・ワークシートなどを記録し、評価の材料とする。1時間の授業ごとに評価するだけでなく、題材や1年間を通して、長期的な視点で評価する。

①充実した鑑賞活動など音楽とつながる活動を行うことで子どもたちの学びの姿が変化したか。思いや意図をもって表現することに生かすことができたか。

②仲間とつながる学習環境を用意したり、子ども同士のつながりを捉えたりすることで、すべての子どもたちの学びの深まりが見られたか。

③自分とつながること（過去の経験や既習内容を生かして学びを進めていくこと）や学びを振り返ることで、すべての子どもたちの学びが高まり、達成感を味わう姿が見られたか。

【参考文献】

- [1] 文部科学省(2008)「小学校学習指導要領解説 音楽編」教育芸術社
- [2] 金本正武・坪能由紀子(2009)「平成20年度版 小学校新学習指導要領 ポイントと授業づくり 音楽」東洋館出版社
- [3] 鹿毛雅治(2007)「子どもの姿に学ぶ教師―「学ぶ意欲」と「教育的瞬間」―」教育出版
- [4] 教育音楽研究グループ(2013)「音と言葉で子どもがつながる」教育芸術社

音楽科 1年B組	いろいろな おとを たのしもう ～シンコペーテッド クロック～	居澤 結美
-------------	------------------------------------	-------

1. 題材について

この題材では、いろいろな音に対する興味・関心を育てながら、音色の違いや音の様々な特徴をとらえて表現の仕方を工夫することに重点をおいている。音色が生み出す面白さを楽しみながら聴く鑑賞の学習を十分に深め、そこで得た楽器の音色への興味・関心をベースにして学習を展開していく。打楽器の様々な演奏の仕方を体験し、音色の違いを感じ取りながら、表現の工夫をしていきたいと考える。

前の単元では歌詞の内容から想像をふくらませたが、本題材では音色を中心にしながら子どもたちの表現への考えや願いをはぐくんできようと考えている。また、鑑賞と表現を関連付けた学習の過程で気付いたり発見したりした音の面白さを十分に生かして音楽づくりに取り組む。

○指導要領との関連

A 表現 (1) 歌唱 ア, イ (2) 器楽 ア, イ, ウ (3) 音楽づくり ア, イ B 鑑賞 ア, イ, ウ
関連する[共通事項] ア (ア) 音色, リズム, 強弱 (イ) 反復, 問いと答え

○本時で扱う楽曲について

「シンコペーテッド クロック」 ルロイ アンダソン
「サンドペーパー バレエ」 ルロイ アンダソン

2. 題材設定の理由

(1) 本実践の主張点

さまざまな音色や音を身体表現し、伝え合う活動を通して、音色や音に対する興味・関心をもち、これからの学習で音を聴く活動を楽しむことができるようになるであろう。

主張点をめざすために下記のことに取り組んでいく。

i) 様々な楽器(日常のもの)を用いて、材質や打法、打つ場所などの音色の違いを聴き比べ、感じ取る。

本校には、様々な楽器がある。また、生活の中にも打てば、興味・関心のおこる音や音色の出るものはたくさんある。それらからうまれる音や音色は材質や打法、打つ場所などで大きく変化する。子どもたちは自ら、打ちながらその違いに気付いていく。またそれを友だちと聴き比べたり、伝え合ったりする。

そして互いに意見を交わしながら、自分たちのイメージや意図に合った打法や打つ位置など工夫することの楽しさを感じ、音や音色、打楽器など様々なものに興味・関心をもてると考える。

ii) 聴く視点を提示する

子どもたちは音楽に対する語彙がまだまだ少ない。たとえばある音を聴いて「耳の痛くなるみたいな音があった」と言ったとする。これは、あるときは“高い音”をしめし、あるときは“大きい音”をしめす。またあるときは“気持ち悪い、いやな音”をとらえる。このことで分かるように子どもたちはどのような感じがしたという感受の部分がとても多い。その点から聴く視点を示し、感受と知覚とつなげられたらと考える。また聴く視点を提示することは子どもたちの興味・関心をもたせることができる。

具体的には、“急いでる感じ”、“飛び上がる感じ”などの感受の視点を提示し、それは音楽のどの部分から感じたかを子どもたちが伝え合う。また知覚の視点も提示しどのように感じたのかも伝え合う。

(2) 学校提案・教科提案とのかかわり

今年度、音楽科では「つなげる」ことをキーワードに進めている。

- ① 教材…思いや意図が表現しやすいものであるため、演奏表現の工夫が広がると考える。
- ② 仲間…友だちの奏でる音に耳を傾けたり、聴き合ったりすることで新たな気付きが生まれる。
- ③ 自分…自分が気付かなかった表現や技能ができるようになることや友だちの音を聴き表現をすることで自分の成長を感じる。

上記のことをもとにして、「音楽は楽しい」、「次の活動も楽しみだ」と感じられるように、友だちとつながることで問い続け、学び続ける姿をめざしていきたいと考える。

3. 題材の目標

- 身近な楽器の音色の特徴を感じ取り、演奏の仕方や楽器の音色に興味・関心をもって演奏したり音楽をつくったりする。
- 楽器の特徴的な音色を感じ取り、楽曲のよさや面白さに気付いて聴く。

4. 題材の評価規準

(各時間の細かな規準については、当日資料に記載)

ア 音楽への関心・意欲・態度	イ 音楽表現の創意工夫	ウ 音楽表現の技能	エ 鑑賞の能力
①打楽器の音色や楽曲の楽しさに気付いて聴く学習に進んで取り組もうとしている。 ②打楽器の音色に興味・関心をもち、音の鳴らし方を工夫しながら表現する学習に取り組もうとしている。 ③楽器の音色に興味・関心をもち、自分の思いに合った音を探しながら、音色を生かして音楽をつくる学習に楽しんで取り組もうとしている。	①歌詞の表す様子や気持ちを想像して、それに合った歌い方を工夫し、どのように表現するかについて思いをもっている。 ②音色や強弱の変化を聴き取り、それらが生み出す面白さを感じ取りながら、場面に合う音や、反復、問いと答えを生かした音楽の表現を工夫し、どのような音楽をつくるかについて思いをもっている。	①星空の様子を思い浮かべながら、自分の歌声や発音に気をつけて歌っている。 ②身近な楽器に親しみ、自分の音に気をつけて旋律を演奏している。 ③楽器の音色の特徴に気付き、一つの楽器からいろいろな音の鳴らし方を見付けたり、音楽の仕組みを生かして音楽をつくったりしている。	①楽曲全体にわたる気分を感じ取り、想像したことや感じ取ったことを言葉で表すなどして、楽曲の楽しさや演奏のよさに気付いて聴いている。

関連する【共通事項】ア(ア)音色, リズム, 強弱(イ)反復, 問いと答え

5. 題材計画 (全10時間) (本時2/10)

◆評価規準【評価方法】

第1次	みみをすまして いろいろな おとを ききましょう (鑑賞) 2時間
i	「サンドペーパー バレエ」 ◆ア①【ワークシート・発言内容・表情観察】
ii	「シンコペーテッド クロック」 ◆エ①【ワークシート・発言内容】
第2次	ほしぞらの ようすに あう おとで えんそうしましょう (歌唱・器楽) 4時間
i. ii. iii	「きらきらぼし」を歌う ◆ウ①【演奏聴取】
	「きらきらぼし」をけんぱんハーモニカでふく ◆イ①【演奏聴取】
iv	「きらきらぼし」 歌唱とけんぱんハーモニカで合わせる ◆ウ②【演奏聴取】
第3次	いろいろな おとを みつけて ならしましょう (器楽・音楽づくり) 1時間
	「おとさがし」→トライアングルとすずの音色、演奏の仕方、鳴らし方などを知り、1つの楽器からいろいろな音の出し方を見つける。 ◆ア②【演奏観察・発言内容】
第4次	ほしぞらの ようすを あらわす おんがくを つくりましょう (音楽づくり) 3時間
	「ほしぞらの おんがく」 ◆ア③【行動観察】、イ②【演奏聴取】、ウ③【演奏聴取】
i	打楽器で星空の様子に合った音選びをする。鳴らし方を絵や線、言葉、身体表現であらわす。
ii	音楽の仕組みを知り、星空の様子に合った表現を工夫し、自分の考えや願いをもって音楽をつくる。
iii	音楽の仕組みを生かして、終わり方を工夫し、演奏して聴き合う。

6. 本時について

一番のねらいは身体表現からうまれる言葉を音楽の言葉にしていくことである。それを、第2～4次、そしてこれからにつなげていきたいと考えている。特に第4次では楽器を使っの初めての音楽づくりとなる。だからこそ本時では音色や響き、音楽的要素をたくさん出せる、きっかけになる鑑賞の時間になりたいと考えている。本時であつかう「シンコペーテッド クロック」は「同じことが何回も出てくる」(反復, くりかえし)「音が大きくなったり, 小さくなったりする」(強弱), 「耳がきーんってする」(音色, 鉄の質感からくる音の特徴など)など子どもたちが素直に感じることをどんどん出せる曲である。またリズムや音色が特徴的なので身体表現をしやすい楽曲となり、子どもたちなりの表現がたくさん出て、それを共有し、音楽の言葉を得ながら、音楽そのものを楽しめる時間となることを考える。

音楽科 5年C組	曲想を生かして合奏しよう ～表現の工夫がいっぱい「マンボNo. 5」～	内垣 美佳
---------------------------	------------------------------------------------------	--------------

1. 題材について

本学級の子どもたちは、1学期に「リボンのおどり」の器楽合奏に取り組んだ。音を重ね合わせるだけでなく、ソロで演奏する箇所をつくることで変化をつけたり、音のバランスに気を付けて合奏したりする姿があり、自分たちで工夫して演奏することを少しずつ楽しんできている。

本題材では、思いや意図をもって、曲想にふさわしい表現を演奏することをねらいとする。合奏する教材は、「マンボNo. 5」（ペレス プラード作曲／初山正博編曲）である。この曲は、分散和音的な旋律が繰り返されるが、リズムカルで誰もが楽しんで演奏できる楽曲である。「リボンのおどり」では7～8人のグループで合奏したが、今回は学級全体で表現を工夫して合奏する。つい教師主導になりがちな器楽の授業であるが、子ども主体で授業を展開していけるようにしたい。まずは、各パートの特徴をつかみ、自分のパートの役割を意識できるようにする。そして、考えた表現の工夫を音だけでなく、言葉をつかって仲間に伝え、クラス全体で演奏に対する思いや意図を共有していく過程を大切にしていく。第一次で行う鑑賞教材は、「威風堂々 第1番」（エルガー作曲）である。曲想とその変化に着目して聴くことによって、音楽を形づくっている要素や楽曲の構造を理解できるようにする。鑑賞で得た学びを合奏に生かし、自分たちの思いや意図を込めた「マンボNo. 5」を楽しく演奏する子どもたちの姿をめざす。

2. 題材設定の理由

（1）本実践の主張点

自分のパートの役割を意識し、反復が多い楽曲の表現の工夫を考えることで、自分の思いや意図をもって演奏する力が育まれるであろう。

楽譜を追って演奏するだけでなく、「こんなふうに演奏したい」という思いや意図をもって演奏することの楽しさを味わわせたい。本実践で扱う器楽教材「マンボNo. 5」は、反復が多く、ア→イ→イ→イ→イ→ウ→ウ→エ→オ→オ→カ→カ→ア→キ→キ→キ→クという構造になっている。「反復」はあらゆる曲で使われている音楽の仕組みの一つである。今回、この反復の多さが子どもたちに思いや意図をもたせるきっかけになり、反復する部分の強弱、音の重なりなどを工夫することにつながるのではないかと考える。また、それぞれのパートの特徴を捉え、自分のパートの役割を意識させる。自分のパートに着目することで、曲全体を見渡して表現の工夫を考えることができるのではないだろうか。

（2）教科提案とのかかわり

音楽科では、「つなげる」をキーワードに、表現及び鑑賞活動を通して、「思いや意図をもって表現できる子ども」をめざしている。本題材では次の3つの「つなげる」を大切にする。

①教材とつなげる

吹奏楽で演奏している「マンボNo. 5」やその他のマンボの音楽を聴く活動などを取り入れ、一人一人が楽曲に親しみをもち、リズムを身体で感じながら合奏に取り組めるようにする。

②仲間とつなげる

表現の工夫を考えていく過程では、音だけでなく、どうしてそのような工夫を考えたのかという根拠を言葉で表せるようにしたい。拡大楽譜を用いて、グループの気付きや考えなどを書き込めるようにし、視覚化しながら全体で意見を共有できるようにする。

③自分とつなげる

表現に生かすことができるようにこれまでの学習を振り返ったり、自分たちの演奏を録音して客観的に聴いたりする場を設ける。

(3) 問い続け、学び続ける子どもたちをめざすために

本題材において期待する「問い続け、学び続ける子どもたちの姿」とは、「仲間と思いや意図を伝え合いながら、学習してきたことを使って表現の工夫をしようとする姿」である。子どもたち自身が表現を工夫して演奏したいと思えるように、例えば強弱をつけた演奏とつけない演奏ではどう違うかを実際に演奏して感じ取らせたり、鑑賞活動で他の曲の表現方法に気付かせたりできるようにする。また、演奏を発表する機会をつくるなど、達成感を味わえるようにし、次の学びへの意欲につながるようにする。

3. 題材の目標

曲想とその変化を感じ取って聴いたり、曲想にふさわしい表現を工夫して思いや意図をもって演奏したりする。

4. 題材の評価規準

ア 音楽への関心・意欲・態度	イ 音楽表現の創意工夫	ウ 音楽表現の技能	エ 鑑賞の能力
①リズムや旋律、速度や強弱のかかわり合い、変化によってつくられる楽曲の構造を理解して聴く学習に主体的に取り組もうとしている。	①互いの楽器の音、リズムや旋律の重なり、反復やその変化を聴き取り、それらの働きが生み出すよさを感じ取りながら、曲想の変化に合う表現を工夫し、どのような演奏にするかについて思いや意図をもっている。	①楽器の音色や旋律の特徴を生かして、旋律楽器や打楽器を演奏している。	①リズムや主な旋律の反復、変化などを聴き取り、それらが速度や強弱とかかわり合っ生み出すよさや面白さを感じ取りながら、楽曲の構造を理解して聴いている。
②互いの楽器の音、リズムや旋律の重なり、反復や変化に興味・関心をもち、パートの役割を意識して曲想の変化に応じた表現の工夫をしながら合奏する学習に主体的に取り組もうとしている。		②互いの楽器の音、リズムや旋律の重なり、反復と変化を聴き合い、曲想の変化を味わいながら楽器を演奏している。	

【共通事項】ア(ア) 音色、リズム、旋律、強弱、音の重なり(イ) 反復、変化、音楽の縦と横の関係

5. 題材計画 全6時間 (本時5/6)

第一次 曲想の移り変わりを感じ取りながらきこう 「威風堂々第1番」(1時間)		評価規準
第1時	曲想が移り変わる面白さを感じ取ってきこう	関-①, 鑑-①
第二次 曲想を生かした演奏の工夫をしよう 「マンボNo. 5」(5時間)		評価規準
第2時	曲の感じをつかんで、主旋律を演奏しよう	関-②, 技-①
第3時	パートの役割を意識してパート練習をしよう①	技-①
第4時	パートの役割を意識してパート練習をしよう②	技-①
第5時	表現の工夫を考えて楽しく合奏しよう① <本時>	関-②, 創-①
第6時	表現の工夫を考えて楽しく合奏しよう②	創-①, 技-②

6. 本時について

本時までには、それぞれのパートの特徴をつかみ、役割(主旋律・副次的な旋律・和音・低音・リズム)を意識しながらパート練習を積み重ねておく。本時では、反復の部分はどう工夫して表現するか、学級全体で思いや意図を擦り合わせながら表現を創り上げていきたいと考えている。